



## 巻頭言—“イマジ”と“オシント”—

ロシアが2月24日にウクライナに対して軍事進攻というより侵略戦争を一方向的にしかけました。連日テレビやインターネットを通じて報道される戦況に胸が痛み、いたたまれない気持ちになってしまいます。

2020年の初頭あたりから新型コロナウイルスが世界中で感染拡大し、私たちはいまなお翻弄されています。自然科学や医学の進歩のもとで、人類が克服したと思われていたはずの感染症が、私たちの日常を大きく変えたのです。そして社会科学、あるいは政治や外交、民主主義において、やはり克服したと思っていたはずの「戦争」が、いま起きています。

1971年に発表されたジョン・レノン (John Lennon) の楽曲、「Imagine」が静かなメロディーと透き通る歌声と共に流れてきます。「Imagine(想像してみてください)」と訴えかけるこの反戦歌は、国家の名のもとに人を殺害したり、命を落としたりするような世界を、社会を改め、平和を希求しています。ユートピア的な世界観は夢物語かもしれないけれど、そんなにむずかしいことじゃない、ぼくはひとりじゃないはず、いつかあなたも仲間になって、きっと世界はひとつになるよ…

Imagine there's no countries  
It isn't hard to do  
Nothing to kill or die for  
And no religion, too  
Imagine all the people  
Living life in peace... You...  
You may say I'm a dreamer  
But I'm not the only one  
I hope someday you'll join us  
And the world will be as one

この唄は「天国も地獄もない」という歌詞で始まります。でもウクライナの惨状を地獄と呼ばずして、なんと表現するのでしょうか。でもそんな凄惨な状況にあって、地下のシェルターに響き渡る「雪とアナの女王」を熱唱する少女の歌声や、ウクライナの人々を励まそうとオンライン上でシンクロする美しいヴァイオリンの音色、そして息も絶え絶えに避難してきた子どもたちにお菓子をそっと手渡すボランティアと歓喜する子どもたち…やっぱり天国はあるのかもと祈るような気持ちで、私たちは天国を、幸せを求めてしまいます。

アメリカは、昨年末にはすでに隣接する東側の地域のみならず首都キエフへのロシアによる軍事進攻の可能性につい



て、たびたび警告していました。正直なところ、あまり重要な情報だと思っていませんでしたが、いまとなってみればアメリカ、あるいはイギリスなどのいわゆる西側諸国による情報はかなりの程度で正確だということに気づきます。

だとすれば、もっと早く NATO としてウクライナに軍を配備しておけば、ロシアの軍事行動を止めることができたのではないかともいえます。そしてより深く掘れば、すでに指摘されたりしていますが、アメリカはウクライナの惨劇は織り込みずみで、ロシアをウクライナ侵攻へと掻き立て、そのことによりプーチンの失脚、ロシアの崩壊を戦略的に仕組んだのではないかとも考えられます…。あくまでも推論なので真偽はわかりませんが、ロシアを反面教師とすれば、情報をクローズにして隠蔽することで、また自らの都合に合わせて情報を操作したり、偽情報を流すことで権力を一人にあるいは一極に集中してしまうような体制がこうした愚行を招くということです。だからこそ私たちは情報をオープンにし、自由に議論できる人間関係や組織、社会をつくるようにしていかなければならぬのです。

プーチンを筆頭にロシアは非人道的な空爆で住宅や学校、原発、病院などを攻撃し、多くの市民を殺害しています。にもかかわらず、軍事施設しか攻撃していないなどと平然と「嘘」をついています。しかし、いまや SNS や衛星画像など公開情報の分析により、複雑で多様な情報を総合化して分析する「オシント (OSINT)」（open source intelligence の略）の技術とその専門家によって、被害の実態やロシアによる偽情報が暴かれつつあります。これまで強引な嘘で強硬に突き進んできましたが、もうそうしたことが通用しなくなるのです。

こんな状況だからこそ、想像する力と分析する力を育み、そして民主的であることを大切にするという世界にしていかなければならないと思います。 KCD ラボ代表 松端克文

## シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋

### 今月のテーマ：「孤独・孤立問題」への対応

#### ◆「孤独・孤立問題」への政府の対応

今日、孤独・孤立問題への対応が大きな社会的課題となっている。国際的にはイギリスでメイ首相（当時）のもと、コロナ禍の前になるが、2018年1月に「孤独は現代の公衆衛生上、最も大きな課題の一つ」として世界で最初の「孤独担当大臣」が置かれている（多賀幹子『孤独は社会問題—孤独対策先進国イギリスの取り組み—』光文社、2021）。

日本では、新型コロナウイルスの感染拡大が始まって約1年が経った昨年2月19日に菅内閣のもとで、コロナ禍で深刻化している「孤独・孤立問題」に対応するため「内閣官房孤独・孤立対策担当室」が設置されている。この対策室は、自殺防止や高齢者の見守りなど関係府省にまたがる政策を束ねる司令塔になることを目的としており、首相官邸のホームページには「孤立・孤独対策」として、自殺対策、生活困窮者支援、児童虐待防止対策、子どものSOSへの対応、性犯罪・性暴力への対応、DVへの対応、フードバンク、住まいの支援などが挙げられている。

たとえば、厚生労働省によるとコロナが感染拡大し始めた2020年の自殺者は2万1081人と、11年ぶりに増加している。2021年は251人少なくなると2万830人（速報値）となっておりやや減少しているが（減少率は1.2%）、依然として高い水準になっている。内訳では男性が前年より240人少ない1万3815人で、12年連続の減少となっている一方で、女性は7015人となり、前年に比べて11人減ったものの2年連続で7000人台となっている。また、小中高生（児童生徒）では2020年は499人で前年比100人増で過去最多となったが、2021年では473人とやや減ったものの、過去2番目に多くなっている（2022年1月21日公表）。

コロナ禍では非正規職の割合が多い女性に、より厳しい生活を強いることになっている。このほかDVの相談件数も2020年度では19万30件となっており、前年度から7万754件の増加（約1.6倍）となっている（内閣府2021年5月25日公表）。このようにコロナ禍では、それ以前からあった生活上のさまざまな課題がより顕在化してきているといえる。

#### ◆孤独・孤立対策の重点計画

さて、政府は2021年3月以降、孤独・孤立対策担当大臣を議長として、全省庁の副大臣により構成される「孤独・孤立対策に関する連絡調整会議」を定期的に開催するなど検討を重ねているが、昨年2021年12月28日に「孤独・孤立対策の重点計画」を公表している。ここでは当事者や家族などが置かれている状況は多岐にわたり、孤独・孤立の感じ方・捉え方も人によって多様であるということをもふまえた上で、「孤独」は主観的概念、ひとりぼっちと感じる精神的な状態、「孤立」は客観的概念、社会とのつながりが少ない状態というように概念の整理をし、一律の定義で所与の枠内で取り組むのではなく、「望まない孤独」と「孤立」を対象として多様なアプローチや手法による対応の必要性が確認されている。そして、「孤独・孤立は、人生のあらゆる場面において誰にでも起こり得るものであり、支援を求める声を上げること

や人に頼ることは自分自身を守るために必要であって批判されるべきものではない」として、「孤独・孤立は当事者の自助努力に委ねられるべき問題ではなく、現に当事者が悩みを家族や知人に相談できない場合があることも踏まえると、孤独・孤立は社会全体で対応しなければならない問題である」としている。

その上で「孤独・孤立対策の基本方針」として、①孤独・孤立に至っても支援を求める声を上げやすい社会とする、②状況に合わせた切れ目ない相談支援につなげる、③見守り・交流の場や居場所づくりを確保し、人と人との「つながり」を実感できる地域づくりを行う、④孤独・孤立対策に取り組むNPO等の活動をきめ細かく支援し、官・民・NPO等の連携を強化する、の4つが挙げられている。対象となる人が特定の属性で限定できないだけに、幅広い施策が求められる。とりわけ「自助」が強調されたり、自己責任感が強いために他者からの支援を忌避したり、支援を受けている人を責めるような世間の風潮があったりする。したがって辛いときや苦しいときに他者に助けを求めたり、他者の助けを受けることができるいわゆる「受援力」を高めていくための取り組みが求められる。また孤独や孤立は社会関係の貧困であるともいえるので、つながりをつくるための取り組みが求められ、多様な「居場所」づくりも重要な課題となる。

#### ◆求められる支援活動

また、孤立・孤独問題への対応は、行政施策だけでできるものではないので、多様な機関・団体による連携・協働が必要になる。国では2021年9月から3回の準備会合を経て、「官・民・NPO等の取組の連携強化の観点から、各種相談支援機関やNPO等の連携の基盤となる全国的なプラットフォーム」として、先月2月25日に「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」が発足している。このようにいまや「孤立」や「孤独」は、社会として取り組むべき課題なのである。1995年の阪神淡路大震災後の災害復興住宅での「孤独死」は2021年では62人、死者の平均年齢は77歳であった。調査が開始された2000年以降、最大は2002年の77人で、最小は2015年の33人となっている（『毎日新聞2022年1月14日』）。こうした状況をふまえると個別訪問も含めた見守りのための仕組みづくりが重要となるし、集い・交流ができるサロンのような居場所づくりが課題となる。

また、就労に向けた支援も課題となる。北海道釧路市では就労可能な状況にあることが多いと考えられる母子世帯が全国平均よりかなり高くなっているといった地域特性などをふまえ、2004年に生活保護の自立支援の取り組みに向けての厚生労働省の補助事業を受けて以降、母子家庭の就労支援策を通じて、釧路モデルといわれる「中間的就労」のスキームをつくり、一般就労をゴールとするのではなく、自尊心の回復や就労体験的なボランティア活動なども組み込んだ多数なプログラムのもと支援を展開している（小磯修二『地方の論理』岩波新書、2020）。こうした実践は生活困窮者自立支援法などの法制度改正にも結びついている。「個人責任」だとする社会としての責任回避は許されない。

KCD ラボ代表 松端克文

（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

\* 毎月ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

## シリーズ よろこび荘の取り組み⑥ ～日中活動責任者から～

最終となりました『障害者支援施設よろこび荘の取り組み』第6回目の報告は、日中活動責任者である遠山伸一氏です。

### ◆取り組みについて

デイセンターBではよろこび荘1階の利用者の方々20名を中心に活動の提供を行っています。よろこび荘のなかでも、1階は比較的年齢の若い利用者が多く、あわせて強度行動障害の様子が非常に強く表れています。現在は、強度行動障害支援者養成講座で学んだ支援技法（時間の構造化＝スケジュールの提示・視覚支援など）を用いて活動を提供しています。すべてのご利用者にごこの支援技法があてはまるわけではありませんが、職員の言葉がけや促しに頼らず、視覚的な手がかりをもとに自ら活動に取り組むこと（自立性の向上）、実物や写真・イラストを使って活動を選ぶなど、ご利用者が自分の希望や思いを表現できること（思いの表出）を目標のひとつとしています。



### ◆特性の理解～支援

強度行動障害と判定を受けた人の、およそ8割がASD（自閉スペクトラム症）だと言われています。スペクトラム（境界があいまいで連続している）と考えると、強度行動障害のほぼ全員がASDであると厚生労働省の資料にあります。支援に悩むさまざまな行動は脳機能上の問題で、私たちとは脳の使い方が違うようです。あいまいで抽象的なことが理解できなかつたり、細かなことに気づいて違いを受け入れることができなかつたり、思いの表出が独特であったりします。

支援するにあたっては、ご利用者と一緒に活動をしながら細かくアセスメントしてその特性を理解する必要がありますが、デイセンターBではむずかしく考えすぎずに、好きなことや得意なことをもとに、ご利用者がなにを手がかりに物事を理解しているか、表れている行動にはどんな意味や理由があるのか…など、支援のヒントを探すことに力を注いでいます。支援が上手くいかないときでも「なんですか？利用者さんにとってどこが分かりにくかった？前との違いは？」とクイズを楽しむように考え、集めた情報から仮説を立てて活動のなかで答え合わせ（仮説の検証）をしています。特性を理解して配慮しながら支援するということは、いわば細かく気遣うことでもあります。特性を理解して、さまざまな支援技法を用いて支援を実施することはもちろんですが、なによりも利用者の方々を思いやりながら、優しくていねいにかかわることが重要だと思っています。

### ◆とにかく分かりやすく！

ご本人主体で活動に参加して楽しんでもらうためには、「あいまいなことを明確にする」「どうすればよいかを具体的に示す」など、わかりやすさの追求が必要であると考えています。言葉に頼りすぎずに写真や実物を用いた視覚的な提示が多くのご利用者にご有効です。これは職員にも当てはまることで、支援する職員がわかりにくければ当然、利用者の

方々にはもっとわかりにくいと思います。活動の動線を考えて物を配置する、片付ける場所は一目見てわかるようにするなど、環境的に親切でわかりやすいように工夫をしています。

考えてみれば、世のなかには視覚的な提示や構造化がたくさんあります。道路標識、駐車場の枠線、ショッピングモールの案内など…。私たちも社会に配慮されながら、普段の生活を送っていることに改めて気づきます。活動や生活の場では私たち職員にとってわかりやすくて、ご利用者にとってはわかりにくいことが多くあります。わかりにくさを見つける際、職員の視点で物事を考えるのではなくご利用者の視点で考え、それをわが身に置き換えて特性上のしんどさに共感することが近道だと感じています。「私たちならわかるけど、〇〇さんに伝わる？」と相手の立場に立って支援に取り組んでいます。

### ◆楽しく、自分らしく、笑顔で過ごせるように

福祉の最終的な目的は、ご利用者一人ひとりが幸せを感じながら楽しく過ごすことだと思います。日中活動も例外ではなく、活動を通じて楽しみややりがいを感じて過ごしてもらうことが目的だと思っています。活動だけではなく職員との他愛ないやり取りやかかわりも重要で、大切にしているのは接遇の心がけと、共に楽しむ姿勢です。「～させる」、「～しなければならない」と、強制的で義務のようなかかわりではなく、それぞれのご利用者の様子や要望に合わせた過ごし方の提案がベースとなり、それに支援者の意図を無理なく反映させる。これは非常にむずかしいのですが、そこに専門性をもつことで職員のやりがいにつながっています。あとは、かかわる職員も思いっきり楽しむこと。かかわり方の質に気をつける必要はありますが、職員も笑顔で楽しみながら活動を提供することは、接遇の観点で見ても重要であると思います。

### ◆今後の日中活動

現在に至るまで、たくさんの職員の理解と協力を得ながら、日中活動の習慣化とその幅を広げることに取り組んできました。よろこび荘には看護師、言語聴覚士、音楽療法士などの多職種が在籍しており、それぞれの専門的な視点での助言を受けて活動プログラムができています。生活支援員の皆さんには日常の生活支援や関連業務があるなかで、活動支援にも取り組んでもらっています。限られた人数で、さまざまな特性のご利用者に対して衣食住はもちろん、健康と安全を守ることが常に求められる「共同生活のプロフェッショナル」ですが、こちらの突飛な提案でも「とりあえずやりましょか！」と気持ちよく協力してくれたり、活動の準備や計画の立案などに一緒に取り組んでくれたり…。全職員が、チームとしてかかわっていることに心から感謝しています。

今後の日中活動については、「法人内の日中活動に一体的に取り組みたい」、「よろこび荘では各階の垣根を越えた活動提供をしたい」、「創作活動はご利用者の独自性を最大限に引き出し芸術として世間に出したい」など、さまざまに想いを膨らませています。いずれも、引き続きたくさんの職員の理解と協力が必要です。これからも利用者の方々と共に楽しみながら、「チームよろこび荘」として、皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思っています。（よろこび荘：遠山伸一）

## カンファレンス・カウンセリング室の研修 ～連カン室からの報告②～

本年度 10 月 15 日発行の Journal vol.43 で、「社会福祉法人陽気会 地域連携室/カンファレンス・カウンセリング室（略称：連カン室）」の活動実績について、報告しました。

今回は、連カン室からの報告パート②として、カンファレンス・カウンセリング室が、法人内で行った研修内容の詳細について報告します。

### ◆放課後等デイサービスへの研修

カンファレンス・カウンセリング室が放課後等デイサービスの管理者や職員と相談し、計画した 2020 年度と 2021 年度の研修内容は、表 1 と表 2 の通りです。

表 1 2020 年度 放課後等デイサービス研修内容

回	内容
第 1 回	発達と障がいを理解しよう
第 2 回	学童期の子どものココロと行動を読み解こう
第 3 回	児童期に見られるつまずき
第 4 回	ことばにつまずきのある子どもへの支援

表 2 2021 年度 放課後等デイサービス研修内容

回	内容
第 1 回	支援：構造化と視覚支援
第 2 回	連携：保護者と学校をつなぐ工夫
第 3 回	支援：有効な複数指導
第 4 回	支援：ノンバーバルサインへの対応
第 5 回	連携：学校との連携のポイント
第 6 回	支援：社会性の発達段階と支援
第 7 回	支援：言語の発達段階と支援
第 8 回	支援：かずの発達段階と支援
第 9 回	事例検討会①
第 10 回	事例検討会②

2020 年度は、「子どものココロと行動の読み解きガイド」（明治図書）「発達障害のある子へのアセスメントと指導プログラム」（明治図書）をテキストとして使用し、発達障害に関して障害特性や子ども理解を中心に行いました。また、ロールプレイングを用いたグループワークを行い、つまずきの背景にある要因を理解するようにしました。



2021 年度も、基本的な知識や理解を積み上げながら、「支援」「連携」「事例検討会」の 3 本柱で、実践との関連づけを心がけました。

放課後等デイサービスは、地域の小中学校内の特別支援学級や特別支援学校に在学する児童生徒が多く利用していることから、障害特性以外に、発達段階を必ずおさえるようにしました。支援を考える上で、「障害特性」「発達」の 2 つを把握することが前提になるからです。

### ◆児童入所施設おかば学園への研修

2021 年度は、児童入所施設のおかば学園でも、研修を行いました。内容は表 3 の通りです。

表 3 2021 年度 おかば学園研修内容

回	内容
第 1 回	発達障害への対応 1 怒りのコントロール①
第 2 回	保護者への対応
第 3 回	心の育ちと心に応じた支援
第 4 回	怒りのコントロール②
第 5 回	学校生活への支援と不登校への対応
第 6 回	発達障害への対応 2 行動の背景
第 7 回	発達障害への対応 3 発達段階
第 8 回	怒りのコントロール③
第 9 回	まとめ①
第 10 回	まとめ②

おかば学園の職員は、入所の子どもたちと生活を共にする時間が長く、子どもの思いや気持ちに寄り添うことがさらに重要な支援の要となります。そのため、研修内容は、子どもの心や行動理解が中心になりました。しかしながら、基本的な知識や理解も欠かせないため、『子どものココロと行動の読み解きガイド（明治図書）』『発達障害のある子へのアセスメントと指導プログラム（明治図書）』を参考テキストとして使用しました。

### ◆GRIT とは…

「やり抜く力」または「粘る力」と定義されている言葉に「GRIT（グリット）」があります。GRIT は、心理学者でペンシルバニア大学のアンジェラ・ダックワース教授が、「社会的に成功を収める最も重要な要素は、才能や知能や学歴ではなく、個人のやり抜く力である」として、提唱されました。社会的に成功しているといわれる方々が共通してもつ心理特性として、注目を集めています。GRIT は、生まれもった能力ではなく、後天的で、大人になってからも、身につけることができるものです。

GRIT は、以下の 4 つの要素が必要だとされており、それぞれの頭文字を取って「GRIT（グリット）」と呼んでいます。

表 4 GRIT の要素

Guts（度胸）：困難なことに立ち向かう
Resilience（復元力・回復力）：失敗しても諦めない
Initiative（自発性）：自分で目標を見据える
Tenacity（執念）：最後までやり遂げる

## ◆GRIT と研修との関係

福祉や教育の現場で、日々、一生懸命に支援を行っている、利用者や子どもにとって適切な支援になっているかと迷うことや心が折れそうになることがあると思います。

研修を実施することで、受講者に GRIT が身につけば、自分自身のモチベーションをコントロールでき、自己を責めずに、心にゆとりをもって、日々の支援を行うことができるのではないかと考えます。GRIT につながる研修を実施することが支援の質を担保することになるのではないのでしょうか。

## ◆GRIT につながる研修になるために

2020 年と 2021 年の研修で GRIT につながるために意識したことは、図 1 のように、PDCA サイクルでの視点です。各プロセスにおいて、研修を行うときの意識すべき点や工夫すべき点をまとめます。

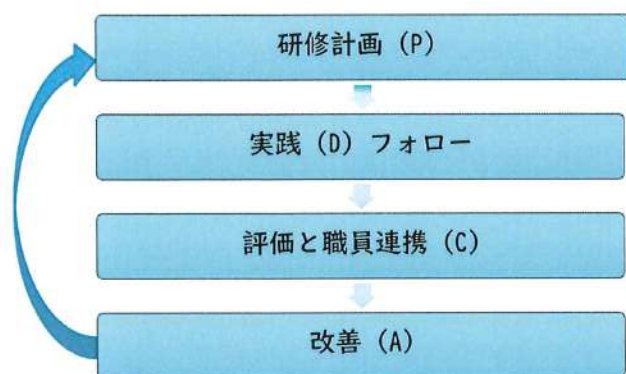


図1 研修のPDCAサイクル

### 【研修計画 (P) 段階】

研修計画段階では、研修形式、研修内容の厳選、研修時間の設定がポイントです。

#### ①研修形式は、受身型ではなく参加型

基礎知識を伝える講義の時間も必要ですが、一方的になってしまうと、研修は「講義を受ける」「知識を学ぶ」という受身型に比重がかかりがちです。

しかし、前半に講義、後半に講義をもとにしたグループワークの時間や実践につながる実践的な内容を設けることで、参加型の研修に近づきます。

#### ②研修内容は、日々の支援とリンク

研修内容は、現場が日々の支援で知りたいと感じている要望をもとに内容を絞り、計画します。学んだことが日々の実践に活用できることで、「また次も！」という意欲につながります。

#### ③研修時間は全員が参加できる時間帯の設定

放課後等デイサービスは、日々、放課後の時間に支援を行っています。しかし、職員は、午前中にその日の準備や前日までの記録の整理や支援に関する事前調整等を行っていて多忙です。基本的に、送迎も職員が分担して行います。土曜日や夏季休暇等は、朝早くから夕方まで、子どもの支援を行っています。このような条件下で、全員が揃って研修することには無理があります。しかしながら、全員出勤日で職員会議を行う時間内に研修時間を設定することができました。児童入所施設のおかば学園でも、常に職員が交替で勤務してい

るため、全員が揃うことがむずかしい状況でした。しかし、月に1回だけ、全員が揃うように調整して行う職員会議の時間内に研修を組み込むことで、全員参加が可能になりました。

### 【実践 (D) フォロー段階】

研修部署が施設内にあるため、実践フォローが可能です。

#### ①支援の現場に向く

研修後も折に触れ支援現場に足を運びました。職員室で話を聞くだけでなく実際に行っている児童への支援を確認することができます。施設内にある研修機関としての強みです。

#### ②「考え」「意識」をフィードバック

支援の現場に向いたときに、職員の強みを強化することを心がけています。具体的には、職員が研修内容を意識した実践を行っている様子を読み取り、そのことを捉えて言語化しフィードバックします。子どもにかかわっているときに、アイコンタクトやOKの動作で返すときもあります。また、翌朝の打ち合わせで、ほかの職員にシェアするようにしています。

#### ③“How to”ではなく“PDCA サイクル”で！

支援がうまくいかないと、すぐにできる方法がないかと思うのは当然です。うまくいかなかった理由を支援計画の実態をもとに、特性や発達段階に合った支援だったかを振り返り、次に同じ状況になったとき、どうするかを一緒に考えます。実践の答えは実践のなかにありと、支援計画もPDCAサイクルで考えることが、遠回りに見えて、応用力のある支援になります。

#### ④テキストは共通のものさし

職員同士で、特性や発達を見直すときには、共通のものさしがないと互いの認識にズレが生じ支援も微妙に異なってしまいます。研修では共通のものさしとしてのテキストを用意することも重要で、共通言語化していく助けにもなります。

### 【評価と職員連携 (C) 段階】

今回の研修で、効果の目安としたのは以下のことです。

#### ①チームワークの育成

グループワーク研修の目的は、仲間と一緒に考えて日々の支援を改善していこうという姿勢の育成です。日々の支援で、ポジショニングや役割分担、支援が子どもに合っているかの吟味等、インフォーマルな場面でも行いやすくすることです。

#### ②個人攻撃ではなく、改善を考える雰囲気

打ち合わせ時に、日々の支援でうまくいかなかったことをオープンに話し合える雰囲気づくりが重要です。チームワークがよくなると、個人攻撃ではなく、次のときの支援につながる話になります。

### 【改善 (A) 段階…要望に応える】

研修を継続するためには、職員の改善の要望に応えることを心がけます。内容、時間の設定、方法等で意見や希望が出たときには、研修を提供する側が、柔軟に対応する姿勢が必要です。

今後も、さらに子どもたちの心地よい居場所となるよう、日々の支援がさらに充実することにつながる研修を職員たちと一緒に構築していきたいと思ひます。(高畑英樹)

## ちょっといいですか？大西ですけど…

－考え抜く力－

### ◆コロナ対策は人権侵害か

コロナに翻弄され続けて2年が過ぎました。この間、治療薬も、完璧な対策も開発されないまま、「人と人が接触しないこと」が最善の予防対策とされています。世間では、ソーシャルディスタンス、リモートワーク、オンライン、パーティー等、いままで無縁だったカタカナがすっかり定着してしまいました。どれも人と人との隔絶を意味する言葉で、私自身はやはり好きになれませんし、できれば言葉も、そのもの自体も使いたくありません。が、福祉業界も当然のようにこの流れと言葉に巻き込まれ、外出、面会の自粛に始まり、陽性者の隔離、濃厚接触者の自宅待機等が普通となりました。が、よくよく考えてみると「人権侵害」と紙一重の状態にまで追いつまれているような気がします。

本来、本人の意思に反して行動を制限、抑制することは人権侵害とされています。権利擁護や人権尊重、身体拘束をキーワードに真剣に障害者の権利保障に取り組んでいこうとしている、まさに、このタイミングで、これに逆流するかのような対策が当然のように打ち出されてきました。一方、通常であれば、利用者と現場職員の間には、ソーシャルディスタンスやオンラインという言葉は存在しません。その結果、クラスターにつながってしまうというなんとも皮肉な状況を生み出しています。私自身は、なにが正しいのか、どの対応が最善なのか、いまだに正解がわからないまま日々の対策や業務に追われています。

### ◆考え抜く力

人と人の交わる場所にしか福祉は存在しません。支援というこの仕事は、人と人との交わりのなかで行われます。学校や職場では、この支援に関して多く知識や技術を学ぶことができます。そのための学校であり研修です。また、それぞれの施設にはマニュアルや手順書が存在していると思います。

では、多くの知識を詰め込んで、技術を習得して、マニュアルを隅々まで覚えておけば、完璧な支援ができるのかといえば、そうでもないように思います。日々の支援現場では、学んだとおり、マニュアルのとおりには運べません。なぜなら、相手は「人」だからです。そこがこの仕事のむずかしさであり面白さであると思います。支援の正解は、そのときのその現場にしか存在しません。だから自分のもっている知識や技術、施設のマニュアルをベースにして考え抜くことが大切です。考え抜くためには、応用力が必要です。考え抜く力と応用できる力…この二つの力が、私たち支援者には必要なのだと思います。(大)



## 陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、63年目を迎えています。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

### ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

### 陽気会の SNS

Facebook Instagram Twitter

フォローよろしくお願いします

編集委員会：松端 克文

大西 博之・朝日 満子

大島 由香利

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078(981)7271

Fax : 078(981)0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email: [kcdlab@youkikai.or.jp](mailto:kcdlab@youkikai.or.jp)

